

委託事業実施内容報告書

平成25年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 【地域日本語教育実践プログラム(A)】

受託団体名 駒ヶ根市

1. 事業名称

「駒ヶ根市 日本語学習システム」による日本語学習事業の実施

2. 事業の目的

日本人・外国人・行政との協働で「駒ヶ根市 日本語学習システム」を運用し、日本語を母語としない市民に対する日本語学習を通じて、日本語学習に関わる人材を育成し、効果的な日本語学習の仕組みを普及させることで、日本人と外国人との円滑な市民生活を創出するための効果的な日本語学習が、市民が主体となり継続的に運用できるようにする。

3. 事業内容の概要

①日本語教室の実施

生活に密着したシチュエーションをテーマにした日本語教室を実施する。日本語教育の知識を持つ「日本語コーディネーター」と打ち合わせをした上で決定した授業を、市民ボランティアが実施する。また、学習者には市民ボランティアが「サポーター」として同席し、授業で不明な点等を学習者個々人のレベルに合わせて支援する。授業には必要に応じて「ゲスト」を招き、専門家の見地から授業をサポートしてもらう。

②日本語ボランティア研修の実施

当市の日本語教室へ関与する市民の増加を目指し、日本語教育に関する初心者向けの研修を実施する。最終的には教室全体をリードするだけのスキルを獲得することが理想だが、まずは個々の学習者のレベルに合わせて支援をする「サポーター」になるための基礎知識を学ぶ研修とする。

また、既に教室で指導役を務めているボランティアに対して、実際の教案作成を通じたスキルアップ研修を実施する。

③オリジナル教材の作成

これまでの日本語教室で得た知見をベースに、当市の実情に即した教材を作成する。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成25年6月7日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市役所	高坂 保 春原 直美 宮越 幸代 松岡 純子 杉浦 早織 中嶋 憲一 塩澤 真洋	・委嘱状の交付 ・運営委員自己紹介 ・運営委員長の選出 ・今年度の日本語教育事業について	・日本語教室の存在をどのように知ってもらうか。企業や公民館等とタイアップしていくことも大切ではないか。 ・外国人のニーズをいかに把握するか。外国人とのパイプを持つキーパーソンらとの連携を密にする。 ・本事業に関心を寄せる日本人をどのように増やすか。
2	平成25年7月11日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市役所	高坂 保 春原 直美 宮越 幸代 松崎 伸司 松岡 純子 杉浦 早織 塩澤 真洋	・日本語教室の実施状況 ・ボランティア研修の内容について ・学習教材の作成について ・市内の関係機関との連携について	・「日本語を教える」ということに二の足を踏む市民が多い。ゲストを活用するなどし、関心層の増加に努める。 ・まずは外国人と日本人とが気軽に話することができる場づくりをする。 ・公民館や看護大学との連携を密にすることで、関心層の増加を目指す。

3	平成25年10月31日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市役所	高坂 保 春原 直美 宮越 幸代 松崎 伸司 松岡 純子 杉浦 早織 中嶋 憲一 塩澤 真洋	<ul style="list-style-type: none"> 日本語教室の実施状況 日本語ボランティア研修の実施状況 学習教材の作成について 市内の関係機関との連携について 	<ul style="list-style-type: none"> 学習者の数がなかなか増えない。ニーズ把握の必要があるのでは。 教室の形(コーディネーター、指導者、サポーター)は整ってきた。 ボランティア研修を実施したところ、予想を上回る参加があった。今後、どうやって教室運営につなげていくか考える必要がある。 行政主導の日本語教室はコミュニティ形成の場としての役割もある。教室をいかにして地域に落とし込んでいくのか。公民館活動との連携にヒントがあるのではないか。
4	平成26年2月20日 13:00~14:30		駒ヶ根市役所	高坂 保 宮越 幸代 松岡 純子 杉浦 早織 中嶋 憲一 塩澤 真洋	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の日本語教育事業の実施報告 今年度の日本語教育事業のふり返り 次年度へ向けての改善点の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の事業をふり返り、どのような効果があり、どのような課題が浮かび上がったのか。 学習者の確保に苦勞した。教室の内容が外国人のニーズに合っていたかどうか検証する必要がある。 新たなボランティアの方を掘り起こすことができた。これらの方を今後どのように事業に巻き込んでいけるか。ボランティアの方の役割を再整理し、明確にすることが重要。 次年度は公民館活動と連携して事業を実施する。その中で、社会教育活動としての日本語教育事業の在り方を検討する。

5. 日本語教室の実施

(1) 講座名称: 「駒ヶ根市日本語学習システム」に基づく日本語教室の実施

(2) 目的・目標: 市民ボランティアが中心となって、「生活に密着した日本語」を教授する教室が運営される

(3) 対象者: 駒ヶ根市に在住、勤務、通学する外国籍住民等

(4) 開催時間数(回数) 51時間 (全30回)
※初級者クラスの学習者が途中でゼロになってしまい、予定通り開講できなかった

(5) 使用した教材・リソース
 ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集
 ・日本語教育に関心のある市民ボランティア、教室内容について専門知識を有する方

(6) 受講者の総数 21人
 (出身・国籍別内訳 フィリピン10人、タイ2人、中国1人、カンボジア1人、インドネシア1人、インド1人、ペルー3人、チリ1人、メキシコ1人)

(7) 日本語教室の具体的な内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	平成25年6月16日 13:00~14:30	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	1人	フィリピン(1人)	病気の症状を伝える	「...が痛い」という表現を学び、体の不調を伝えられるようになる。	杉浦 早織	-
2	平成25年6月16日 13:00~14:30	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	5人	フィリピン(3人)、タイ(1人)、ペルー(1人)	適切な薬が購入できるようになる	薬を買った体験談の発表、薬局の店員と話す際、自身の病気の症状をより正確に伝えられるようになる練習。	大宮 優子	ロペス 愛(通訳)
3	平成25年6月23日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市福祉センター	1人	フィリピン(1人)	体の部位を覚える	病院での会話に役立つよう、体の部位についての語彙を学ぶ。	松崎 伸司	-
4	平成25年6月23日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市福祉センター	2人	フィリピン(1人)、中国(1人)	市販の薬の用法を読み取る	薬の用法、注意書のコピーを提示し、読み取りの練習をすることで、薬に使われる独自の表現を学ぶ。	野口 裕一	ロペス 愛(通訳)

5	平成25年6月30日 13:00~14:00	1.5時間	駒ヶ根市福祉センター	1人	フィリピン(1人)	日常生活を表現する	病院での会話に役立つよう、前日の自分の行動を説明するための表現を学ぶ。	大宮 優子	-
6	平成25年6月30日 13:00~14:30	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	3人	フィリピン(1人)、中国(1人)、ペルー(1人)	問診票に関し受け答えができるようになる	地元の総合病院の問診票をベースに、ゲストの看護師らの協力を得て、初診を想定したロールプレイを実施する。	平井 登美之	宮越 幸代 (看護師)
7	平成25年7月7日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市福祉センター	1人	フィリピン(1人)	簡単な計算	数字と加減乗除を学び、簡単な計算の演習をする。	杉浦 早織	-
8	平成25年7月7日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市福祉センター	3人	フィリピン(1人)、中国(1人)、ペルー(1人)	緊急当番医を見つけ、実際に行くことができる	当市の市報から緊急当番医を見つけ出す練習をし、その病院までの行き方を尋ねる表現を学ぶ。	野口 裕一	-
9	平成25年7月14日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市老人福祉施設 ふれあいセンター	1人	フィリピン(1人)	方位詞、指示詞	前後左右上下、ここ、そこ、あそこなどの表現を学ぶ。	野口 裕一	-
10	平成25年7月14日 13:00~14:30	1.75時間	駒ヶ根市老人福祉施設 ふれあいセンター	5人	フィリピン(3人)、タイ(1人)、ペルー(1人)	日本の健康保険制度を知る	当市の国民健康保険の担当者をゲストに招き、日本の健康保険のしくみや専門用語について学ぶ。	松崎 伸司	木下 岳士 (駒ヶ根市国保医療係長)
11	平成25年7月21日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市福祉センター	1人	フィリピン(1人)	許可、提示の表現	「～してもいいですか」「～したほうがよい」などの表現が使えるようになる。	平井 登美之	-
12	平成25年7月21日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市福祉センター	3人	フィリピン(2人)、ペルー(1人)	健康診断に関する表現	健康診断を想定してのロールプレイ等を通じ、特有の語彙や表現を学ぶ。	大宮 優子	-
13	平成25年7月28日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市福祉センター	1人	フィリピン(1人)	許可、提示の表現	「～してもいいですか」「～したほうがよい」などの表現が使えるようになる。	杉浦 早織	-
14	平成25年7月28日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市福祉センター	2人	フィリピン(1人)、タイ(1人)	熱中症、糖尿病の予防	暑さが本番を迎える中、当市の保健師をゲストに招き、熱中症の予防法、対処法を学ぶ。併せて、糖尿病予防のポイントを理解する。	松崎 伸司	吉澤 歩 (保健師)
15	平成25年10月27日 10:00~12:00	2時間	駒ヶ根市銀座商店街	4人	フィリピン人2人、タイ人1人、中国人1人	薬箱の日本語を読む	薬箱に書いてある日本語を読み、内容を理解するためのヒントを得る。	松岡 純子	
16	平成25年11月3日 13:00~14:45	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	3人	フィリピン(1人)、ペルー(2人)	冬に罹りやすい病気、インフルエンザの予防	寒さが本番を迎える中、当市の保健師をゲストに招き、風邪やインフルエンザの予防法、対処法を学ぶ。また、手の洗い方を実践する。	野口 裕一	吉澤 歩 (保健師)
17	平成25年11月10日 13:00~14:45	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	6人	フィリピン(3人)、タイ(1人)、ペルー(2人)	美容院、理容院で髪型をリクエストする際の表現、語彙	市内の美容師をゲストに招き、ロールプレイ等を通じ、髪型をリクエストする際の特有の語彙や表現を学ぶ。美容院・理容院での体験談を発表する。	杉浦 早織	赤塩 千寿 (美容師)
18	平成25年11月17日 13:00~14:45	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	2人	ペルー(2人)	冬場の運動不足を防ぐ日本語	当市のスポーツ担当職員をゲストに招き、冬場の運動事情、簡単にできる運動等について、実技を交えながら日本語で学ぶ。当市のスポーツ施策について理解を深める。	松崎 伸司	赤羽 知道 (駒ヶ根市スポーツ振興係長)
19	平成25年11月24日 13:00~14:45	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	3人	フィリピン(2人)、ペルー(1人)	冬場の乾燥に対処する肌の手入れに関する日本語	冬場乾燥する当市の特性を踏まえ、エステティシャンをゲストに招き、肌の乾燥対策にまつわる日本語の語彙や表現を学ぶ。	野口 裕一	田中 千穂 (エステティシャン)
20	平成25年12月1日 13:00~15:00	2時間	駒ヶ根市福祉センター	1人	ペルー(1人)	おせち料理に関する日本語	正月が近づく中、栄養士をゲストに招き、日本の正月の料理に関する語彙や表現を学ぶとともに、実際に紅白なますを作ることを通じ、日本文化についての理解を深める。	平井 登美之	細井 敦子 (栄養士)

21	平成25年12月8日 13:00~14:45	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	2人	フィリピン(1人)、ペルー(1人)	火災発生時、119番通報で必要な日本語	暖房機器の使用等による火災が懸念される季節を迎える中、消防士をゲストに招き、火災通報に必要な語彙や表現を学ぶ。また、実際に119番に通報し、リアリティあふれるロールプレイを実施する。火災予防について理解を深める。	野口 裕一	小原 敏幸 (消防司令補) 高木 美喜代 (通訳)
22	平成25年12月15日 13:00~15:00	2時間	駒ヶ根市福祉センター	4人	フィリピン(1人)、タイ(2人)、ペルー(1人)	雪道の運転の仕方について日本語で学ぶ	雪に不慣れな外国人が多いことを想定し、駒ヶ根警察署の警察官をゲストに招き、雪道の運転の仕方、雪が降った際の注意事項等を日本語で学ぶ。警察官に対し、日頃の疑問に感じていることを質問する。	伊藤 勝	平井 祥太郎 他2名(駒ヶ根警察署) 高木 美喜代 (通訳)
23	平成25年12月21日 10:00~12:00	2時間	駒ヶ根市福祉センター	3人	カンボジア(1人)、タイ(1人)、ペルー(1人)	日本の不思議	日本の文化や習慣について不思議に思ったことを学習者に話してもらうことで、日本語力の向上と日本文化への理解促進を図る。	野口 裕一	-
24	平成26年1月18日 10:00~11:45	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	6人	フィリピン(2人)、タイ(1人)、カンボジア(1人)、インドネシア(1人)、ペルー(1人)	来客対応のマナー	来客対応について、友人、教師、上司、姑等、様々な訪問者を想定し、ロールプレイを交えて学ぶ。	野口 裕一	高木 美喜代 (通訳)
25	平成26年1月25日 10:00~11:45	1.75時間	駒ヶ根市赤穂公民館	2人	フィリピン(1人)、カンボジア(1人)	席順、土産のマナー	宴会、タクシー、エレベーター等の場面を想定し、座席の順番についての理解を深める。また、他人の家を訪問する際の手土産の渡し方についてロールプレイを交え、日本語で学ぶ。	伊藤 勝	高木 美喜代 (通訳)
26	平成26年2月1日 10:00~11:45	1.75時間	駒ヶ根市中沢公民館	6人	フィリピン(2人)、タイ(1人)、カンボジア(1人)、インドネシア(1人)、チリ(1人)	他人の家を訪ねる際のマナー	他人の家への訪問を想定してのロールプレイ。ふるしきの使い方とマナーについて実技を交えての演習。	小栗 潔	-
27	平成26年2月8日 10:00~11:45	1.75時間	駒ヶ根市役所南庁舎	-			大雪のため中止		
28	平成26年2月15日 10:00~11:45	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	-			大雪のため中止		
29	平成26年2月22日 10:00~11:45	1.75時間	駒ヶ根市福祉センター	4人	タイ(1人)、カンボジア(1人)、インドネシア(1人)、ペルー(1人)	子どもの卒業、入学に関するマナー	年度末を迎え、卒業式、入学式にまつわるお祝いのやり取り、式典出席の際の服装等のマナー、「年」と「年度」の違いについて、経験豊富な市民の方から学ぶ。	野口 裕一	-

30	平成26年3月1日 10:00~11:45	2時間	駒ヶ根市福祉センター	7人	フィリピン(2人)、タイ(1人)、カンボジア(1人)、インドネシア(1人)、インド(1人)、ペルー(1人)	日本の入学式	入学式の流れ、服装、持ち物などを、入学式への出席経験のある市民ボランティアの方を交えながら学ぶ。	大宮 優子	-
----	--------------------------	-----	------------	----	---	--------	--	-------	---

(8) 受講者の募集方法

- ・チラシ(日本語、英語、中国語、ポルトガル語)を作成し、市役所庁舎、市内の外国人住民に関するキーパーソン、派遣会社等の企業に配布
- ・駒ヶ根市のホームページ、市報で告知
- ・外国人住民宅への訪問

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)

授業風景①: 日本の健康保険制度を知る 平成25年7月14日実施 学習者5名

【ねらい】日本の健康保険制度や関連する専門用語について理解する

【ゲスト】駒ヶ根市国保医療係長

【内容】

- ・参加者自己紹介
- ・病院へ行く際、持参するものについて話し合い
- ・保険証の種類について解説
- ・学習者の出身国の保険制度について発表
- ・保険料についての解説
- ・高額医療費についての解説
- ・授業のふり返り
- ・ゲストへの質疑応答

【所感】

「健康保険制度」という日本人でさえ難しいと思われるテーマの授業だった。指導的役割を担うボランティアが事前に内容を極力わかりやすくなるよう準備してくれたため、外国人の学習者にも、わからない点がありつつも、理解が進んだのではないかと感じた。

そもそも健康保険制度に関し、外国人の関心は非常に大きかった。病院・病気は外国人の多くが不安に感じることであり、それにまつわる保険に関しても教室で取り上げることが望む声が多かった。それもあり、難しい語彙があっても、学習者は興味関心を失うことなく授業に熱心に参加していた。

制度の直接の担当者にゲスト出演いただいたことは非常に大きなメリットがあった。どんな質問が出てもしっかりな返答が得られただけでなく、「専門家から話をきいた」というのは、参加者にとって非常にお得感が合ったように感じる。今後も学習者のニーズを踏まえながら、専門家等をゲストとしてお招きすることで、教室の質の向上を目指すとともに、事業の認知度アップに努めたい。

【写真】



授業風景

授業風景②: 火災発生時、119番通報に必要な日本語 平成25年12月8日実施 学習者2名

【ねらい】 火災発生時、必要な情報を119番に伝えることができる

【ゲスト】 消防士

【内容】

- ・参加者自己紹介
- ・本日のテーマ(火事に気をつけよう)の紹介
- ・問い:「火事が起きたらどうするか」
- ・119番通報した際に伝えるべき内容を考える
- ・ゲストの消防士と電話を想定してのシミュレーションを実施
- ・火災発生場所を幾つか設定し、「～の近く」「～の隣」「○階」などの表現を学ぶ
- ・実際に119番に連絡する(消防署には事前に通知)
- ・ゲスト消防士への質疑応答

【所感】

ゲストに消防士をお招きし、「119番通報ができるようになる」ための教室を実施した。最初に119番通報する際に必要となる表現の練習、次にゲストの消防士との方との119番のシミュレーション、そして実際に携帯電話を使つての119番通報(テスト通報)と、徐々にステップアップする内容とした。

消防署の方々にご協力いただき、非常にリアリティあふれる教室となった。実際に通報する場面では、普段は陽気な外国籍の方が、緊張のあまり汗びっしょりになって電話する場面も見られた。消防署の方も「外国人の方から電話を頂く機会はほとんどないので、勉強になった」と感想を述べていた。

出火場所を指定する練習では、市内の有名と思われる建物の写真をあらかじめ撮影しておき、「これはどこでしょう」とクイズ形式で出題したが、非常な盛り上がりを見せた。また、外国人がどこの施設を把握しているのか、日本人側が知る機会にもなった。

【写真】



ゲストの消防士(左)と
119番通報のシミュレー



実際に119番にテスト通
報する学習者(右)

授業風景③: 他人の家を訪れる際のマナー 平成26年2月1日実施 学習者6名

【ねらい】 訪問先によりあいさつ表現を使い分けられるようになる

【内容】

- ・参加者自己紹介
- ・他人の家を訪問する際に使う日本語についてグループディスカッション
- ・仲の良い友人の家を訪問する場面のロールプレイ
- ・上司の家を訪問する場面のロールプレイ
- ・質疑応答
- ・風呂敷の使い方あれこれ

【所感】

駒ヶ根市の中央には諏訪湖に端を発する天竜川が流れている。これまで日本語教室は市の中心がある天竜川の西側で実施してきたが、今回、初めて天竜川の東側の地域（竜東地区）で実施した。会場が変わり、気分転換にもなったようだ。

あいさつのマナーについては、それほどの困難はないようだったが、訪問相手との関係性によって表現を使い分けることは難しいようだった。上級者は敬語を含むより丁寧な表現を知りたがる傾向にあり、そのニーズの一部をカバーできたように感じた。

また、風呂敷の使い方は大好評だった。1枚の布でいろいろなものを包むことができる、そして包み方も多種多様であることに、学習者は驚いていた。このような日本文化に関わる演習を交えた教室は好評のため、様々なバリエーションを考え、提供したい。



授業風景



ふるしきの使い方の練習

(10) 目標の達成状況・成果

年間を通じ、授業を実施できたことは大きい。ボランティアにもノウハウが蓄積され、当市に密着した教室が根付きつつある。

一方で、日本語をほとんど話せない「初級者クラス」を設定していたが、年度当初5人の登録があったにも関わらず、途中から学習者がゼロになってしまい、事実上休止状態となってしまったのは残念である。ボランティアもいつ学習者が来てもいいよう準備をしていたが、実践されずにお蔵入りとなってしまった。

学習者のアンケートでは、手応えの違いこそあれ、すべての方が「日本語が上達した」「教室が役に立った」と回答した。これは外国人にとって授業内容が有意義だったことを裏付けている。

(11) 改善点について

- ・日本語教室と地域の他組織とのつながりをつくる必要がある。たとえば、公民館で活動している各種団体等と連携し、より地域に密着した教室としたい。
- ・より緻密な学習者のニーズ把握が必要。今年度、外国人家庭への訪問などを通じ、インタビューを重ねてきたが、地域の外国人の実態を踏まえ、その生活向上に資するための教室とするために、引き続き、インタビュー等を続けていく。

6-1. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称： 駒ヶ根市日本語ボランティア研修

(2) 目的・目標： 駒ヶ根市の日本語教室で学習者の「サポーター」になるためのスキルを習得する

(3) 対象者： 駒ヶ根市内で日本語学習に関わる意思のある方

(4) 開催時間数(回数) 21時間 (全9回)

(5) 使用した教材・リソース

・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集

(6) 受講者の総数 30人

(出身・国籍別内訳 日本 30人)

(7) 養成・研修の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	平成25年9月 21日 13:00~16:00	3時間	駒ヶ根市 福祉センター	19人	日本(19人)	外国人が直面する言葉の壁を知る	当市に在住する外国人の方を招き、グループワーク形式で生の声を聴くことで、外国人の方がどのような思いで生活しているのか、どのような場面で困難を感じるのか、その一端を知る機会とする。	松岡 純子 (駒ヶ根市日本語コーディネーター)	-
2	平成25年10月 5日 14:00~17:00	3時間	駒ヶ根市 福祉センター	18人	日本(18人)	「生活者としての外国人」に魅力的な日本語学習について理解を深める	「外国人にとって魅力のある教室とは何か」をテーマにグループワークと講義、そして講師の体験談を交えながら具体的に考える。	堀 永乃 (グローバル人材サポート 浜松代表理事)	-
3	平成25年10月 19日 13:00~16:00	3時間	駒ヶ根市 福祉センター	13人	日本(13人)	①多文化共生社会における地域日本語教室の役割 ②外国人と話す際に必要なコミュニケーション・スキル	①長野県の外国人や地域日本語教室の現状についての講義。 ②日本語学習を補助するために必要なスキルについて、外国人の方を交えてのロールプレイを実施。	①春原 直美 (多文化共生のまちづくりアドバイザー) ②松岡 純子 (駒ヶ根市日本語コーディネーター)	-
4	平成25年10月 26日 10:00~13:00	3時間	駒ヶ根市老人福祉施設 ふれあいセンター	15人	日本(15人)	災害時に必要となる日本語について理解を深める	外国人と地域住民とが一堂に会し、「DIG」というゲームを通じ、災害時に役立つ資源が市内のどこにあるか学ぶ。また、災害時に有用な「かんたんな日本語」がどのようなものか、理解を深める。	今井 家子 (長野県看護大学災害看護学教授)	-
5	平成25年11月 3日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市 福祉センター	17人	日本(17人)	当市の日本語教室における実習	当市の日本語教室はメインの日本語指導ボランティアが教室全体をリードし、「サポーター」と呼ばれるボランティアが学習者個々のレベルに応じてきめ細かく対応する点の特徴である。実習では、サポーターとして、外国人との話し方、教え方を実際に体験した。	-	-
6	平成25年11月 10日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市 福祉センター	16人	日本(16人)	当市の日本語教室における実習	当市の日本語教室はメインの日本語指導ボランティアが教室全体をリードし、「サポーター」と呼ばれるボランティアが学習者個々のレベルに応じてきめ細かく対応する点の特徴である。実習では、サポーターとして、外国人との話し方、教え方を実際に体験した。	-	-
7	平成25年11月 17日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市 福祉センター	6人	日本(6人)	当市の日本語教室における実習	当市の日本語教室はメインの日本語指導ボランティアが教室全体をリードし、「サポーター」と呼ばれるボランティアが学習者個々のレベルに応じてきめ細かく対応する点の特徴である。実習では、サポーターとして、外国人との話し方、教え方を実際に体験した。	-	-
8	平成25年11月 24日 13:00~14:30	1.5時間	駒ヶ根市 福祉センター	5人	日本(5人)	当市の日本語教室における実習	当市の日本語教室はメインの日本語指導ボランティアが教室全体をリードし、「サポーター」と呼ばれるボランティアが学習者個々のレベルに応じてきめ細かく対応する点の特徴である。実習では、サポーターとして、外国人との話し方、教え方を実際に体験した。	-	-

9	平成25年12月7日 13:00~16:00	3時間	駒ヶ根市福祉センター	8人	日本(8人)	地域と学習者に「寄り添う」日本語教室について理解を深める	地域日本語教室が持つ可能性について、グループワークや講義をふまえて考える機会とする。	堀 永乃 (グローバル人材サポート 浜松代表理事)	-
---	---------------------------	-----	------------	----	--------	------------------------------	--	---------------------------------	---

(8) 受講者の募集方法

- ・チラシを作成し、駒ヶ根市内の公共施設に設置
- ・駒ヶ根市のホームページへの掲載
- ・プレスリリース

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)

取り組み①: 外国人が直面する言葉の壁 平成25年9月21日実施 場所:駒ヶ根市福祉センター

【ねらい】

- ・日本人と外国人との間になる”壁”を浮き彫りにし、その”壁”を乗り越える手段として日本語教室が持つ可能性に気づく
- ・お互いを知る
- ・これから始まる研修についてワクワクした気持ちになる

【事前準備】

- ・受講者を年齢、性別、日本語ボランティア経験の有無などを考慮し、あらかじめ4グループに分ける
- ・各グループに市内在住の外国人の方が最低1名入るよう、手配する
- ・場を円滑にするため、受講者に料理を一品持ち寄りをお願いする

【当日の流れ】 参加者19名(4グループ)

実施項目	実施内容	ねらい	所用時間
講師自己紹介			5分
アイスブレイキング	・春夏秋冬はどれが好き？ ・スーパーはどこへ行く？ ・出身地は？	・受講者自己紹介 ・緊張を解く	30分
グループワーク①	各グループの外国人に出身国のいいところについて話を聞く	お互いの理解を深める	15分
発表①	グループの代表が発表	共有	15分
グループワーク②	日本に来て戸惑ったことを聞く	外国人の視点を知る	25分
発表②	グループの代表が発表	共有	15分
まとめ	活動を通じ気づいたことを書く	ふり返り	25分
発表③	何人が発表	共有	15分
主催者から	・研修のねらいについて ・駒ヶ根の日本語教室について	主催者のねらいを共有する	20分

【写真】



日本で戸惑ったことについて話す外国人



発表する参加者

取り組み②: 災害時に必要な日本語とは 平成25年10月26日実施 場所:ふれあいセンター

【ねらい】

- ・DIG(Disaster Imagination Game)を通じ、災害時に役立つ資源が地域のどこにあるか外国人と日本人とが話し合うことで、災害に関する互いの認識を知る
- ・災害時に必要な言語について知る契機とする
- ・外国人と日本人とが出会うきっかけとする

【事前準備】

- ・受講者を年齢、性別、日本語ボランティア経験の有無などを考慮し、あらかじめ5グループに分ける
- ・各グループに市内在住の外国人の方が最低1名入るよう、参加者を募る
- ・地域住民に広く参加を呼びかける(今回だけの参加も可)

【当日の流れ】 参加者34名(5グループ)

※この回のみ参加者があるため、上記の表と参加者数が異なる

実施項目	実施内容	ねらい	所用時間
主催者あいさつ	・本日のねらい ・講師紹介		5分
避難食の仕込み			30分
グループワーク①	DIG	避難時に有用な地域資源を知るとともに、その情報を参加者で共有する	60分
発表	グループの代表が発表	共有	15分
避難食の試食			30分
講義	災害時の心構え		40分

【写真】



避難食の仕込み



DIGの実施

取り組み③: サポーター実習 平成25年11月3日実施 場所:駒ヶ根市福祉センター

【ねらい】

当市の日本語教室に学習者を支援する「サポーター」として参加し、実際に外国人とコミュニケーションをとることによって、支援者として必要となる能力に気づき、獲得する契機とする

【当日の流れ】 参加者17名

- ・「サポーター」として学習者の日本語レベルに合わせた支援をする
- ・当市の日本語コーディネーターや先輩サポーターが、気づいた点、留意点等を指導する

【写真】



(10) 目標の達成状況・成果

本研修には募集定員の20名を大きく上回る30名の申し込みがあった。日本語教育事業への関心層の掘り起こしが大きな目標だったため、この点は大きな成果と言える。

研修アンケートを見ても、ほとんどの方が5段階評価のうち、上位2つの高評価だった。この点からも、日本語教育に関心はあるものの、経験のない方にとって本研修が有意義だったことがうかがえる。

また、研修終了後も引き続き日本語教室へのボランティア参加が見られた。このような意欲的な市民を本事業の担い手にどのように育成していくか、引き続き大きな課題である。

(11) 改善点について

- ・研修参加者を日本語教室へと導くための仕掛けが必要
- ・実際に日本語教室に参加した方の役割に不明確な点があったため、戸惑う場面があった。改善が必要

6-2. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称: 「駒ヶ根市日本語学習システム」カリキュラム・教案作成研修

(2) 目的・目標: 日本語教室をリードするスキルがアップする

(3) 対象者: 当市の日本語教室で教室をリードする指導的立場にあるボランティア

(4) 開催時間数(回数) 12時間 (全4回)

(5) 使用した教材・リソース

・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集

(6) 受講者の総数 8人

(出身・国籍別内訳 日本 8人)

(7) 養成・研修の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	平成25年5月25日 13:00~16:00	3時間	駒ヶ根市福祉センター	7人	日本(7人)	「医療」をテーマにした教案作成のノウハウ	当市の日本語学習システムに基づいたカリキュラムや教案作成についての講義、実習。	松岡 純子 (駒ヶ根市日本語コーディネーター)	-
2	平成25年10月12日 13:00~16:00	3時間	駒ヶ根市福祉センター	5人	日本(5人)	「ゲストを交えた授業」に関する教案作成のノウハウ	当市の日本語学習システムに基づいたカリキュラムや教案作成についての講義、実習。	松岡 純子 (駒ヶ根市日本語コーディネーター)	-
3	平成25年11月9日 9:00~12:00	3時間	飯田市伊賀良公民館	4人	日本(4人)	飯田市の日本語教室の見学	飯田市が文化庁から委託を受けて実施している日本語教室を見学し、その方法を学ぶとともに、相互の交流を深める。	-	-
4	平成26年1月11日 14:00~17:00	3時間	駒ヶ根市福祉センター	5人	日本(5人)	「あいさつ・マナー」をテーマにした教案作成のノウハウ	当市の日本語学習システムに基づいたカリキュラムや教案作成についての講義、実習。	松岡 純子 (駒ヶ根市日本語コーディネーター)	-

(8) 受講者の募集方法

・既に日本語指導の経験のある方にメール等で呼びかけ

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)

取り組み①: 「医療」をテーマにした教案作成のノウハウ 平成25年5月25日実施 場所:福祉センター

【ねらい】

- ・「医療」をテーマに授業を計画する場合の教案作成について学ぶ
- ・当市の医療の現状について学ぶ
- ・当市の日本語学習システムについて理解を深める

【事前準備】

- ・市内の医療機関に外国人が来た際の対応についてインタビュー調査
- ・『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集』の読み込み

【当日の流れ】 参加者7名

実施項目	実施内容	ねらい	所用時間
主催者あいさつ	・本日のねらい ・講師紹介		5分
講義	「医療」をテーマにした授業		60分
講義	駒ヶ根市の医療現場	当市の医療現場の実態を知る	20分
演習	「医療」をテーマにした授業づくり		60分
ふり返し	まとめ	本日のふり返し	30分
閉会			5分

【写真】



取り組み②: 飯田市の日本語教室の見学 平成25年11月9日実施 場所: 飯田市伊賀良公民館

【ねらい】

当市の日本語教室を担うボランティアのほとんどは、他の団体が実施する日本語教室に関わったことがない。そこで、同じく文化庁委託の日本語教室を実施している飯田市の取り組みを見学することで、ボランティアの視野の拡大を狙うとともに、ボランティア同士の交流推進を図る。

【参加者】 4名

【所感】

この日、飯田市の教室は「出産にまつわるお祝い」をテーマに教室を実施していた。外国人の方が10名弱、日本人2、3名の参加だったが、お茶やお菓子が用意され、非常に和やかなムードの教室だった。

日本語を指導する方が、経験に基づく日本の事例をわかりやすい日本語で解説し、それを各グループのボランティアの方が、個々の受講者のレベルに合わせて解説していた。また、絵カードをふんだんに使っていたことも印象的だった。

見学終了後は、駒ヶ根市のボランティアから、学習者集め、カリキュラムの作り方、雰囲気づくりの工夫についてなど、様々な質問が出た。これらの質疑応答を通じ、両者の特徴が浮き彫りになっていったように感じた。

飯田市と駒ヶ根市は車で1時間弱の距離にある。このような交流を通じ、互いのレベルアップを図ることは非常に有効であると感じた。

(10) 目標の達成状況・成果

本研修については、既に当市の日本語教室で指導的役割を果たしているボランティアの方のみを対象としているため、ボランティアの希望に添った研修を実施したものであり、終了後も参加者アンケートなどは実施していない。

しかし、これらの研修で取り上げた知識や手法がその後のボランティアの授業に応用されていた事例が多々あり、その事実が本研修の大きな成果と考えている。研修を通じ、指導的ボランティアの日本語教授に関する引き出しは、確実に増えている。

(11) 改善点について

・ある程度経験のある指導者的ボランティアに刺激を与えるような、研修は非常に効果が高い。一方で、ボランティアにどんなニーズがあるのか汲み取っていく仕組みが必要

7. 日本語教育のための学習教材の作成

(1) 教材名称: 駒ヶ根市日本語学習システム オリジナル学習教材

(2) 対象: 簡単な日本語がわかる学習者を対象とした日本語指導者

(3) 目的・目標

日本語を指導したことのない方に対し、「生活に密着した」日本語をどのように教授すればよいか示唆を与える成果物の完成

(4) 構成・総ページ数

- ・表紙・・・1ページ
- ・緒言・・・1ページ
- ・教材の使い方、見方・・・1ページ
- ・目次・・・1ページ
- ・教材本文・・・88ページ

合計 92ページ

- ・資料・・・随時追加

(5) 教材作成会議の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成26年1月 11日 9:00～12: 00	3時間	駒ヶ根市 福祉センター	松岡 純子 大宮 優子 塩澤 真洋	オリジナル教材の内容とレイアウトの検討	教材をまとめるにあたり、各ページのタイトル、レイアウト、フォント、罫線のルール等、細部について検討した。

(6) 使い方

この教材は、当市の日本語事業に携わっているボランティアが、飽くなき試行錯誤を重ねた2年間に渡る取り組みの結晶である。教材には、日本語を少し理解する学習者に対し、文法中心ではなく駒ヶ根市の生活に密着した日本語を教授するためのアイデアやヒントがぎっしり詰まっている。利用者は、最初から順番に教材集を使っていく必要はない。目次を眺め、自分の関心のあるテーマを取り上げたページから使っていただければと思う。

この教材は、実際に当市で実施された授業展開がベースとなっている。それぞれの授業ごとにボランティアがシナリオを作るのだが、うまくいくこともあれば、大きな反省点が残ることもある。その経験を踏まえたことはもちろん、当日出席した学習者や他の日本語ボランティアの意見を汲み上げ、なおかつ無駄をそぎ落とし、シンプルにまとめ上げたものがこの教材である。机上の議論のみで生まれたものではなく、実践を経たものばかりであるため、一定以上の質は担保されていると自負している。

それぞれの項目の最後には、実際にこのテーマに沿って授業した際の学習者の反応や印象深いエピソード等が簡潔にまとめられている。これはただの感想ではない。授業をする中で、ボランティアの心に今なお深く刻み込まれた意味のあるストーリーなのである。この教材の利用者は、教材そのものと、このストーリーの中から授業の空気を立体的に読み取り、より実践的な雰囲気やイメージしながら授業の準備に取りかかることができるはずである。

(7) 具体的な活用例

- 日本語を教えるボランティアに関心があり、日本語教室の見学等の経験のある市民が、実際に教壇に立とうとするとき、そのシナリオづくりのヒントとして利用する。
- この教材をさらにグレードアップさせるためのワークショップを開催することで、ボランティアの能力向上を図ることを目的とした研修を実施する。
- 外国人対応の一助となるためのみならず、実際に外国人が日常生活のどのような場面で困難を感じるのか、教材を通じて感じ取ってもらうため、病院や学校等の施設に配布する。

(8) 成果物の添付

別添参照

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的

日本人・外国人・行政との協働で「駒ヶ根市 日本語学習システム」を運用し、日本語を母語としない市民に対する日本語学習を通じて、日本語学習に関わる人材を育成し、効果的な日本語学習の仕組みを普及させることで、日本人と外国人との円滑な市民生活を創出するための効果的な日本語学習が、市民が主体となり継続的に運用できるようにする。

(2) 目標の達成状況・事業の成果

年間を通じてボランティア主体の日本語教室が実施できたことは大きく評価できる。行政の事業計画とボランティアの思いをすり合わせながら事業展開する中で、ともしれば空中分解の危機に直面するケースもあったが、それを乗り越えて事業を終了できたことは大きな成果と言える。

30名が参加した日本語ボランティア研修は、その都度アンケートを実施した。5段階評価で講座を評価いただいたが、いずれもほとんどの方が「大変良かった」「良かった」と回答していた。また、その後、数人の方が日本語教室にボランティア参加している。この点からも、事業を主体的に運用する人材育成が進んだと言える。

当市の実情に即したオリジナル教材の完成も大きな成果である。日本語学習の仕組みを普及させる上で、大きなメリットとなる。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

- ・教室のテーマを選ぶ際、生活上の行為を列挙したリストは非常に役立った。たとえば、「病院」がテーマと設定しても、どんな場面でどんな内容を誰と話すのか、具体的にイメージすることができ、授業準備がはかどった。
- ・教材例集等をベースに授業を組み立てることで、テーマが異なっても進め方が統一された。それにより、授業の質のばらつきが抑制され、同品質の授業を学習者に提供できた。
- ・著作権の問題がないため、授業中に使用するイラストや写真を準備する際、非常に有り難かった。
- ・クラスでの学習の記録として、自己・他者評価表を一部加工して使用した。たとえば発話について、「単語」、「単文」、「複文」のどのレベルで話しているのか明示するようにした。これにより、「○」「△」などの感覚的なものを、より具体的にとらえられるのではないかと考えた。
- ・教室活動の展開説明をベースにしたクラスの映像があると、効果的に教材例集が理解できると思う。特に副教材の使い方、提示の仕方を検討する際、大きな力となる。
- ・ことば・表現のリストは日本語のみなので、可能であれば翻訳があると有り難い。場合によっては、ボランティアがネット翻訳等に対応しているが、本当に正しいのか判断できないことがあった。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

今回の取り組みを通じ、地域の外国人、外国人にネットワークを持つキーパーソンの方との連携強化がなされた。これらの方々は広報のみならず、日本語ボランティアとして積極的に教室に参加するなど、教室を支える大きな柱となった。

特徴的だったのは当市にある長野県看護大学との連携である。「多文化共生看護学」の授業のフィールドワークの一つに日本語教室を組み込んでいただいた。その結果、多くの学生が授業に参加しただけでなく、客観的な視点から提言をいただくことができた。この授業をきっかけに、個人として日本語教室に参加するようになった学生もいる。非常に多くの収穫がある連携だった。

また、ゲストとして市役所職員、警察官、消防士等、様々な方に教室に来ていただいた。専門的な知見を提供いただくだけでなく、事業を広報するきっかけにもなり、非常に有意義だった。

(5) 改善点、今後の課題について

日本語教室の実施により、外国人と日本人とが協力して事業を構築する「場」が地域にでき、ボランティア研修を通じて、日本語教室や多文化共生に関心を持つ市民の掘り起こし、人材育成がなされ、そしてオリジナル教材の作成によって、これまで個々に蓄積されていた日本語教育のノウハウや知見が整理され、一般化された。

当市の日本語教室の大きな課題の1つは、市民ボランティアを主体とした活動のため、メンバーが固定化される傾向にあり、その経験が社会的な財産として広く共有することが難しい点だった。今回、教室運営、ボランティア研修、教材作成を個々の取り組みではなく、有機的に結びつけて実施することで、教室に関わる市民が大きく増えた。これは前述の課題解決に向けた基盤になると考えている。

今後の課題として、教室をさらに地域に落とし込みたいと考えている。「日本語教育」というと専門的な知識を持った方が実施している取り組みと思う方もまだまだ多い。当市の教室はそういうものではない。日本語学習を通じ、外国人と日本人とが出会い、ふれあい、新たな協働のベースになるものである。そのためには、「日本語教育」と市民との間にあるギャップを埋めていく必要がある。

当市は次年度も引き続き日本語教育事業を実施する。その際は、大きな目標として「日本語教育の地域化」を目指したい。外国人の方を市民が支え、また外国人の力を地域にいかす。そんな地域になるような拠点を日本語教育事業を通じて構築していきたいと考えている。

(6) その他参考資料

- ・日本語教室チラシ
- ・日本語ボランティア研修チラシ
- ・日本語ボランティア研修受講者アンケート
- ・運営委員会議事録